

万博計画具体化検討 WG(意見書)

一般社団法人 Japan Innovation Network (JIN)

西口尚宏

SDGsについて

世界各国のSDGs達成に貢献するというビジョンを掲げ、また、2025年までの継続的なSDGs活動の実行を標榜して万博開催を勝ち取ったことから、有言実行でなければならない。

すなわち、SDGs達成のモデルを模索し実行すると共に、具体的な達成に向けた活動の開始を2019年から実施する必要がある。SDGsを連呼するのみでは、空虚な活動になりかねない。

そのためには、SDGsに関する正しい理解を国内外に広め、共有すると共に、具体的な活動計画を作り、実行していく必要がある。また、具体的な活動内容を決める上では、日本が知見、経験において付加価値を提供出来る分野であることが望ましい。

具体的な活動方針（案）は次のようなものである。

1: 正しい理解を広める。

SDGs自体は広く知られ始めたが、誤解も多い。その誤解をとき、正しい理解を広めていくことは非常に重要な活動である。以下は必要な共通理解である。

- SDGsは、企業や組織の活動内容をSDGsゴールに紐付けて説明するための「コミュニケーションツールではない」
- SDGsは、「イノベーション（意図的なシフト）を興すためのゴール」である。
- SDGsは、企業の「自社ビジネスモデル構築や、他社との連携が重要」である。
- SDGsは、1組織だけで達成できるものは皆無であり、「複数の関係者による協働が必須」である。

2: 具体策の企画・実行を行う。

193ヶ国が合意したSDGsを万博のなかでテーマにするためには、各国により優先順位の違うなかで、多くの人々の心に響き、賛同を得られるテーマであることが望ましい。各国の政治的、経済的な違いを考慮しても、「SDGsの達成をとおした文明の繁栄」を大きなテーマとすることが望ましい。

そのうえで、人々の命や生活に直結するものはより共感を得られやすいと考えられる。従って、「命と生活」を軸として、複数のゴールを中核にして、すなわち「ヘルスケア、ライフサイエンス、食糧、街づくり、防災・減災」などを中核のSDGsテーマとして打ち出してはどうか。

なお、これらは、すべてのゴールと関連性があり、個別のゴールの達成というよりは、SDGsの総合的な因果関係の理解と将来の新しい因果関係のデザインを行うことを、各国との連携の上で実行するという考え方である。

つまるところ、人々が豊かに安全に住み続けることの出来る都市・環境を、命やインフラ、ICTの観点からテーマ出しを行い、SDGsの具体的な計測可能なゴール・ターゲットを複数設定して、具体的な達成を目指してはどうか？

また、その際に、複数のゴールを結びつける「システム思考」でSDGsを推進していく「日本発のSDGs推進モデル・プログラム」を構築し、世界に情報発信しつつ、共有し、実現してはどうか？

このプロセス自体が試行錯誤を旨とするイノベーションのプロセスであり、関係者の協力のもとに試行錯誤を続けなければならないが、地道に継続することが重要である。

例えば、以下のような具体的なターゲットを選び、各国の関係者を巻き込みながら具体的な企画・実行を行う。（選択は今後の詳細議論により決定）

- 3.6「自動車事故による死亡者を半減する」
- 3.4「非感染性のよる死亡者を1/3減らす」
- 11.5「自然災害の被害を大幅に減らす」

大阪・関西という地域について

人工島の上で開かれる万博であるが、瀬戸内海全域の沿岸地域・内陸部のそれぞれの良さを伝えることが出来るような企画があると、多くの関係者の協力を得られるだろう。

関西広域連合という目的を共有する団体も存在していることから、関西の広域の方々とも協働すること、これを機会に、瀬戸内海沿岸地域の魅力が海外に伝わり、その後も継続的なインバウンドの増加に繋がるような企画を今から準備しておく必要がある。

万博を一回のイベントに終わらさないためには、いまから、出来ることは山のようにある。